

あの日

福岡市博多区 相川 義雄

傍若無人に頭上を乱舞していた赤い星の飛行機も、遠雷のような砲声もなく、朝から不思議な静けさが、あたりを支配していた。朝食が終わった頃、班長の日高軍曹があわただしくやって来て、「おい、みんな聞け。わが分隊は、停戦協議国の護衛として本部に行くことになった。急いで武装して集合せよ」と早口に命令した。

本部のある小高い丘には、白い旗が揚げられているのが望まれ、いつもの朝と違うことに、おかしいと思っていた。

分隊は、細い山道を朝露にズボン濡らしながら、本部に向かった。ウラジオストックに上陸したのだとか、ハバロフスクを占領したのだとかの、どこから伝わったのかわからないウワサが隊列を駆けぬけ、半信半疑ながら皆の気持ちを浮き浮きさせた。

昼夜を問わない執拗な砲撃と丘の下を走りまわる戦車の無気味なキャタピラの音から、やっと解放されたという安堵感が、戦いに勝ったという妄想を生じさせ、全体の戦況など全くわからない我々をホッとさせた。

「……こういうことになったから、誠に止むを得ない。我々は、大元帥陛下の命によって…」という部隊長小川少佐の声が、とぎれとぎれに耳に入ってきたが、初めは何をいっているのかサッパリわからなかった。集まっている兵士たちの横に並んで改めて部隊長の話を聞いていると、どうやら負け戦に終わったらしいことが段々とわかってきた。誰もが、にわかには信じられない顔つきであった。

「自分の意志ではなく、陛下の御命令によって降伏したのであるから、決して、自ら恥じることはない。今後、ソ連軍の指揮下に入っても、名誉ある皇国軍人として、厳に軽挙妄動をつつしみ、規律ある行動をとり、健康に留意して、帰国した暁には、祖国再建に努力しなければならない」と部隊長は声涙ともに下る訓示を続けた。

その頃、わが関東軍は、兵員・兵器を南方戦線に送り出して、人材だけは「根こそぎ動員」で揃えたものの、とても精鋭などといえる軍隊ではなく、まさにハリコのトラにすぎなかったのである。

絶対不敗と頭にたたき込まれてきただけに、我々の受けた衝撃はあまりにも大きく、生命の危機から脱し得た喜びよりも、憤りと情けなさの方がはるかに強く、「捕虜」になるという屈辱感は、払い除ける方法がなかった。

短時間に180度の急転換を余儀なくされた兵士たちは、トボトボと自分の陣地に引き返した。往きの高揚した気持ちは、無惨に打ち砕かれて、ヤケツパチになり、帽子や偽装網を地面にたたきつけて、わずかにウツパンを晴らしをしている者もいた。

指示によって、砲と弾薬とを残し、持てるだけの食料を背のうに詰め込み、指定された集合

地点に向かった。銃を天びん棒のようにだらしなく担いだ者、帽子をアマダにかぶった者、上着のボタンをかけていない者など「天皇の軍隊」では決して見られなかった姿は、まさに敗残兵の集団で、階級制だけがかろうじて統制を保っているにすぎなかった。

陣地の奥に避難していた女性や子供の一団が、軍用トラックで山を下りてくるのに出会った。「兵隊さん、御苦労さまでした。どうか御無事で」という、泣くような叫び声が我々の耳をすくどく突き刺し、顔もあげられない恥ずかしさに返事の言葉も出ない有様だった。「生きて虜囚の辱めを受くることなかれ」という戦陣訓の一節が一瞬頭の中をよぎった。

集合場所には、すでに武装を解除され丸腰になった兵士たちが、放心したように、あるものは地面にうずくまり、ある者はヤタラにたばこの煙をはき散らしていた。

緑のルンパカ風の軍服を着たソ連兵が、あとで我々が「マンドリン」と呼んだ自動小銃を首から下げて、鼻歌を歌いながら、ほこらし気に我々の横を行ったり来たりしていた。まだウブ毛が残っているような少年兵や小柄な女性兵士もいた。

やがて、我々の武装解除が始まった。ソ連兵の指示通り「陛下から賜った」ものとして命の次に大事にしてきた兵器を、まるでゴミでも捨てるように無造作に地面に置いた。あっちこちに武器の小山がいくつもできた。木製のワクに納められている手りゅう弾を置いてホッとすると、今度は背のうや雑のうの検査となった。日用雑品は問題なく元の容具に入れ終わったとき、自決用にと1発だけ雑のうに取りのけていて、捨て忘れた手りゅう弾を若い兵が目ざとく見つけ出した。しまったと思うと同時に「マンドリン」を私の胸もとにつきつけて、早口のロシヤ語でまくしたてた。それまでは、割合に友好的と感じられるほどだった彼の態度が一変し、ヘタをするとヤラれるという恐怖心が走った。

大声のロシヤ語に驚いて、同年兵の竹崎がとんで来て流暢なロシヤ語でソ連兵をなだめてくれたので、やっと事なきを得た。彼がロシヤ語に堪能であることを、全く知らなかったし、彼も、そんなことを一言も話したことがなかった。

その夜は、この広場で露営することになったが、天幕などのジャマになるものは一切陣地に残して来たので、文字通り着のみ着のまま草をしとねに寝るほかはなかった。8月とはいえ、満州（現在、中国東北地方）北部の気温の変化は急激で、夏服だけでは寒さが、ひとしお身にしみた。広場の四隅には機関銃がすえられ、集団の周りには、ソ連兵が絶えず巡回し、投光器の鋭い光が捕虜たちをなめ回していた。昼間は、気がつかない死臭がどこからか流れ込み、寒さと行末の不安とで、まんじりともできなかった。

昭和20年8月21日、3年に及ぶ言語に絶する捕虜生活の第一日目のことだった。